

## II 実践論文

### 読みの方略が転移する可能性

——作品を解釈する仮定スキルが他の読みの場面で活用される条件——

佐藤 佐敏

#### 1 問題の焦点

平成20年3月に文部科学省より公示された中学校学習指導要領（小学校学習指導要領）の第一章「総則」において、「活用」という教育用語が初めて学習指導要領に明記され、改訂のキーワードとなった\*1。

「生きる力」をはぐくむためには、学習した内容が学習場面のみでなく、様々な生活場面で活用されなければ意味がない。したがって、授業では、生活場面に広く知識・技能が活用されるように思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくまなければならないということである。

鶴田清司（2008）は「知識の活用を促す授業のあり方」として、「知識を実際の多様な場面で活用することができるか」ということは『学習の転移』の問題に他ならない<sup>1</sup>と指摘しているが、筆者は、この指摘に賛成する。この立場から、筆者は、学習の転移が国語の学習において、どのように起こりうるのかを問題とする。知識・技能が転移する問題について、国語教育を舞台に明らかにされた実践研究の発表は、管見の限り見当たらない。

学校教育は何を目指して行われるのか。「学校教育の目標は、生徒が学校で学習したことを、家庭、職場、地域社会に転移することができるように支援することである」<sup>2</sup>。

しかしながら、市川伸一（1993）は、「従来の学習心理学における転移の研究がほとんど、自然に生じる転移としての『偶発的転移』しか扱ってこなかった。（引用者中略）転移させることを意図して、積極的な方策をとったうえでの『意図的転移』はあまり扱われていない」<sup>3</sup>と指摘している。いわば、「今、生徒が学習した内容は、いつかどこかで想起されて、活用されるだろう」といった曖昧かつ偶発的な転移を期待して、授業が組織されている。意図された文脈の中で、知識や技能が他の場面で活用されることを見越して授業を組織することはあまりない。

これは読みの授業においても同じ状況である。例えば、「登場人物は、どんな心情だろうか」「登場人

物AとBの人柄を比べてみよう」といった発問や指示が、多くの国語教室で繰り返されている。これらの発問や指示を繰り返すだけでは、生徒にどんな知識や技能が身に付くのか、不明である。ここには、指導言がなくとも自力読みのできる学習者を育てるといった授業者の意図が見えない。

読みの方略は、読み手のそれまでの経験や文章の特徴といった状況に依存するものであると考えられてきた。そのため、読みの方略について語られることはあっても、その転移について問題にされることはほとんどなかった。

その一方で、山元隆春（1994）は「読みの『方略』を獲得するということは、その子どもが一人の読者として自立していく上で、抜き差しならない大切な営みである」<sup>4</sup>と述べており、読みの方略をどのように身に付けさせるかという問題を重視している。

本論文では、自力読みのできる生徒を育てることを目指し、読みの方略の転移に問題を焦点化して論究していく。

#### 2 研究の目的と方法

本論文で考察するのは、以下の四点である。

第一に、読みの方略として、どのような方略が有効と成り得るかを考察する。

第二に、どのような授業を組織するなら読みの方略を身に付けさせることができるのか、その基本的な考え方を提案する。

第三に、授業の組織の基本的な考え方に基づいた授業実践を行い、その結果、読みの方略が他の問題解決の場面に転移されたかどうかを検証する。

第四に、検証した結果を基に、読みの方略の転移について、認知心理学の学習方略の転移の研究を援用しながら、考察する。

なお、授業実践と調査は、平成18年度（一部17年度の実践を含む）と19年度に行ったものを記す。読みの方略の転移について一考察を加えることが本論文の目的である。

### 3 読みの方略と仮定スキル

読みの方略には、多種多様なものがある。その分類だけでも一つの研究となるが、筆者は研究の目的から四つに整理した。

第一に、誰もが無意識のうちに行っている原理的な方略がある。「分からなくなったと気付いたら、分かる場所まで戻ってから読み返す」「最初から最後まで何回も読む」などである。

第二に、動作を伴う方略がある。「線を引ながら読む」「声に出して読む」などである。

第三に、スキルとしての方略である。興水実のスキル学習がこれにあたる。「組み立てに気をつけて読む」「順序にしたがって読む」などである\*2。

第四に、思考技能にかかわる方略である。「もし〇〇ならば…」と仮定して読んだり、「たとえば……」と例を挙げて読んだりする読みである。

国語教育は、方略として思考操作を扱う言語論理教育である。井上尚美(2007)は、「思考を操作的に扱っていくことが大切」<sup>5</sup>と述べて、国語教育を言語論理教育として位置付けている。筆者が本論文で扱う「読みの方略」は、メタ思考を働かせて「思考操作をして読む方略」を指している。その方略について、次に説明する。

そもそも読むということは、どういった思考操作を行っているのでしょうか。ここでは教育哲学からのアプローチを使ってみる。宇佐美寛は「ことばがわかるということは、すでにある(引用者中略)ことば-経験の関連の蓄積構造の中に、あとから到着したことばを組みこむことである。また、これにより同時に既存の構造は改造されるのである。このような作用をことばの解釈と呼んでおく」<sup>6</sup>、「解釈は、すでに連関構造をなして蓄積されているコードにそって行われる。また、解釈を通じて今までのコードが修正されたり、新しいコードが連関構造に組み込まれたりする」<sup>7</sup>と述べている。

本論文では、宇佐美のこの「コードの増殖」という考え方に基づいて、「もし〇〇ならば…」という思考操作をする読みを取り上げる。

宇佐美は、「ことば-経験」の連関構造の修正や増殖を図るためには、次のような発問が有効であると述べている。

小説『少年の日の思い出』(ヘルマン・ヘッセ)  
発問 「(もし)、収集していたのが、ちょうではなく、切手や貨幣、絵などだったら、『ほく]

はこのような気持ちを持ったか」<sup>8</sup>。

この発問をすると生徒は、自分の経験を想起しながらちょうを収集する時の様子、その周辺の状況、その時に抱く心情などを具体的にイメージする。同様に、切手や貨幣を収集する時の様子、その周辺の状況、その時に抱く心情を具体的にイメージする。具体的な経験を思い浮かべることで、次のことが分かってくる。

切手やコインは、ちょうよりも手に入れる過程は容易である。探し求めてさすらうということがない。手入れもちょうよりは簡単である。切手やコインは、同じものが世の中に複数存在する。しかし、捕まえたちょうは一匹だけである。切手やコインは、金で買える。ちょうは金で買うことは難しい。

このように「もし、ちょうでなく、切手や貨幣ならば…」と仮定して読むことにより、自分の経験を想起し、ちょうに対する主人公の熱情が、並々ならぬものであることが読みとれるのである。

「もし〇〇ならば…」という思考操作は、「ことば-経験」の連関構造のコードに化学反応を起こさせる。「ちょうをつぶしている姿」は、単なる文字情報にとどまらず、その「ちょう」に込められた主人公の様々な思いまでも含め、具体的な像を形成して読み手に迫ってくることになる。

宇佐美は、「もし〇〇ならば…」を教師が生徒に働き掛ける発問として提案した。そして、この種の発問を教師に奨励している。しかし、筆者は、その思考操作を読みの方略として獲得させ、自力読みのできる生徒をはぐくむことを構想している。

『少年の日の思い出』における「もしちょうが、コインや貨幣ならば」という、「もし〇〇ならば…」といった思考操作を、筆者は「仮定スキル」と名付ける。この仮定スキルは、『少年の日の思い出』の発問例に限らず、「ことば-経験」の連関構造のコードの修正を迫るものである。自分の経験を想起を促す「仮定スキル」は、読みの方略として、コードの修正や増殖をもたらすという意味でおおいに有効である。

例えば、島崎藤村の『初恋』において、「もし林檎が蜜柑ならどうなるか、この林檎が熟していたらどうなるか」と仮定スキルを活用して読んでみる。すると、薄紅の林檎の味覚、見た目、食べる時の状況などを具体的に想起し、蜜柑や熟した林檎のそれと比較することになる。ここでは、筆者が仮定スキ

ルを使った思考を記す。

熟した林檎では甘すぎるな。初々しくないな。蜜柑では柔らかくて水っぽい。初恋としてのほのかな甘さや切なさは、熟した林檎でも、蜜柑でも伝わらない。だから、『薄紅の林檎』は、初恋の初々しく甘酸っぱい切なさを象徴しているんだな。

このように、「もし〇〇ならば…」という仮定スキルを活用すると、作品における「林檎の象徴性」という新たなコードを獲得する。

この思考操作をスキルとして取り出し、生徒にメタ認知させ、その活用を促したらどうなるであろうか。スキルの活用を意識させることで、学習者の経験が想起され、ことばと経験の往復運動が活発となり、そのことによって読みが広がったり深まったりするに違いない。

生徒各自が、「もし〇〇ならば…」と読むことで、解釈が広がったり深まったりするとなれば、その活用を促すことで、自力読みのできる生徒になる。

この仮定スキルを意識して活用することを、読みの方略の一つであると定義する。

なお、筆者は、すべての作品を読む時に仮定スキルが有効になると主張しているわけではない。そのようなパターン化は危険である。ある種の作品においては、仮定スキルを活用することで「ことば一経験」のコードの修正が図られ、解釈が広がったり深まったりするという立場から、以下の論考を進める。

#### 4 読みの方略の転移を促す授業の組織

山元（2005）は「読みの理論において〈方略〉を問題にする場合には、どのような種類の〈方略〉があるのかということよりも、〈方略〉をどのように用い、組織化するのか、ということに関心が向けられる。問題としなければならないのは、〈方略〉を扱う力とはどのようなものであるかということであり、（引用者中略）〈方略〉を行使するということとは、読むことについての自意識を働かせることに他ならない<sup>9</sup>と述べている。「方略をどのように用い、組織するのか」という山元の問いに対して、次の授業の組織を基本的な考え方として提案する。

##### (1) スキルのよさに気付かせる授業の組織

ある教材で、「もし〇〇ならば、どうなるか？」と発問する。この発問により、解釈が深まったり広がったりすることに気付かせ、「もし〇〇ならば…」と考えることのよさに気付かせる。

##### (2) スキルの文型で考えさせる授業の組織

井上（1998）は、「文の型は、認識・思考の型と対応している。文型を教えることは、認識の仕方を教えることに連なる<sup>10</sup>と述べている。この井上の論に則り、学習者に仮定スキルの文型を与える。そして、その文型を活用して自分の読みを説明することを促す。具体的には、課題を提示する時に、「『もし〇〇ならば…』という文型を用いて答えなさい。」と指示を出す。すると、生徒は、この「もし〇〇ならば…」という文型を使って読みを検討する。

この二つの授業の組織を基本として、以下18年度と19年度に行った授業実践を述べる。なお、二つの授業実践は、上記二つの考え方を基本としているが、辿った授業過程は異なっている<sup>\*3</sup>。

#### 5 平成18年度の授業実践とその考察

##### (1) 平成18年度の授業実践の概要

中学校2年生から3年生にかけて、仮定スキルを取り上げて授業した実践の経緯を説明する。

- ① 小説『ゼブラ』（C・ポトク）で、仮定スキルの文型を提示し、「その文型を使いながら考えてみよう」と指示した。（平成17年10月 詳細は省略）
- ② 詩『岩が』（吉野弘）と詩『ジーンズ』（高橋順子）で仮定スキルを使って発問をし、仮定スキルを使うことのよさを実感させた。（5月）

以下、詩『ジーンズ』（高橋順子）の授業実践の一部を紹介する。

発問「もし、ジーンズがスラックスだったとしたら、詩の印象はどう変わりますか？」

生徒の応答例（SはStudentの頭文字で生徒の略称である）

S 1 ジーンズのほうが活動的だ。

S 2 ジーンズのほうが、「遊びが好き」とあるように遊びが似合っていて自由な感じだ。

S 3 「元気」な感じは、スラックスよりもジーンズのほうが合う。

発問「もし、ジーンズが連れていってくれるところが、大草原や海でなく、ショッピングだったら、どうなりますか？」

生徒の応答例

S 4 大草原や海では、ジーンズが活躍できそうだ。瑠璃色が似合う場所でもある。

S5 広く果てしない感じがするので、あいつのことをふっきって、前に進もうとする彼女が想像できる。

S6 大草原や海のほうが、解放感がある。あいつとの思い出を洗い流して、辛い気持ちから解放された感じがする。

教師 「もし〇〇ならば、どうなるだろう」と考えることを仮定スキルと呼びましたね。仮定スキルを活用することで「自由」という「ジーンズの象徴性」が明らかになりました。また、「失恋の痛手からの解放」という「大草原や海の象徴性」が明らかになりました。このように、「もし〇〇ならば…」と思考することで、解釈は深められます。これからの読みにおいても、仮定スキルを活用してみましょう。

③ 詩『喪失ではなく』（吉原幸子）にて、次の発問と指示で授業した。（10月）

発問「話者は大人になることを喜びだと言っていますか。哀しみだと言っていますか。（指示）仮定スキルの文型を使えたら使って答えなさい。」（生徒の応答例は省略）

### (2) 平成18年度の調査

三ヶ月のブランクをおき、七分間テストにて、二問を問うた。その問いの一つが、仮定スキルを活用したかどうかを見取るための問題であった。

H19/2/5 調査学級 N中3年1組37人

※ 眠られぬ母のためわが<sup>よ</sup>誦む<sup>※</sup>童話母の<sup>のち</sup>寝入りし後王子死す

※ 眠られぬ母……病に<sup>ふ</sup>臥して眠ることのできない母

※ 寝入りし後……寝入った後に

問い この童話の結末を母は知っていたのか、知っていなかったのか。どちらの解釈のほうが良いですか。その理由をできるだけ説得力をもって説明しなさい。

この問いの解答として、自分の解釈を説得力のある文章で記述したかどうか、そして、その記述で仮定スキルを使っていたかどうかを調査した。

なお、仮定スキルを使ったかどうかは、次の文型を使っていたかどうかという観点で評価した。

- ① 「もし……ならば、…」
- ② 「……ならば（であれば）、…」
- ③ 「……だとすると、…」

なお、細かい接続助詞や活用語尾については、こだわらないこととした。「……ば、…」 「……と、…」といった文型が使われ、ある状況を仮定して述べているかどうかで判定した。

仮定スキルを使った生徒の記述例を示す。

S7：知っていなかったほうが良い。（引用者中略）もし結末を知っていたら、母にとって悲しくて眠れなくなると思うので、母は結末を知らないほうが良いと思う。（引用者後略）

加えて、このテストを終えた後に、「仮定スキルを意識して問題にあたったかどうか」などを生徒たちにアンケートした。

### (3) 平成18年度の調査結果

まず、二つの観点で生徒の解釈を分類した。

- ・妥当性のある根拠で解釈を述べたかどうか。
- ・仮定スキルの文型を使っていたかどうか。

1 解釈が妥当であり、仮定スキルを用いた生徒	23人 (62%)
2 解釈が妥当であり、仮定スキルを用いなかった生徒	8人 (22%)
3 解釈が妥当でなく、仮定スキルを用いた生徒	0人 (0%)
4 解釈が妥当でなく、仮定スキルも用いなかった生徒	6人 (16%)

次に、このテストを行った時にスキルを意識していたかどうかを生徒が振り返ったアンケート結果で示す。

H19/2/15 調査学級 N中3年1組37人

○ あなたはこの問題を解く際に、「仮定スキル『(もし)～ならば…』という文型)」を使うことを意識しましたか。

1 意識して使った生徒	11人 (30%)
2 意識したが使わなかった生徒	12人 (32%)
3 意識していなかったが、結果として使った生徒	12人 (32%)
4 意識していなかったし、使わなかった生徒	2人 (5%)

### (4) 平成18年度の調査結果の考察

上述のとおり、約60%の生徒において仮定スキルを活用する姿が見られ、約60%の生徒が仮定スキルの活用を方略として意識していた。

意識して使ったという生徒と、使わなかった生徒には、どのような違いがあるのでしょうか。この点について、「スキルをなぜ使うのか」「なぜ使わない

のか」を問うた自由記述から生徒の声を拾ってみる。

「スキルを使った」という生徒の記述

S 8 : 使うことによって, 考えが生まれるから。考えを整理することができるから。テスト問題の記述では, スキルが役に立つから。

S 9 : 仮定スキルを使うことで, 読み手を説得することができるから。

「スキルを使わなかった」という生徒の記述

S 10 : 使わなくても自分の言いたいことを正確に書ければいいから。無理して使うこともないから。

「考えが整理される」という記述は他に2人, 「説得力が増す」という記述は他に3人見られた。S 8 やS 9らの記述から, 「スキルを使う生徒は, スキルを使うことのよさや意義を知っている」と言える。その一方で, S 10のようにスキルを使わない生徒は, スキルを活用するよさを感じていない。このことから, 「スキルのよさを実感できるように授業すること」が, その転移に必要なのではないかということが分かる。

## 6 平成19年度の授業実践とその考察

### (1) 平成19年度の授業実践の概要

平成19年度, 新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校は文部科学省の研究開発指定を受けて「学習スキル」の研究を行った。国語の授業だけでなく, 選択教科の時間を「スキルの時間」として特設し, 1学年3学級において年間を通して, スキルの定着を図る教育課程を編成した。ここでは, 年間扱った幾つかのスキルの中から, 「仮定スキル」に絞って, 段階を追って実践した概要と調査結果を述べる<sup>\*4</sup>。

#### ① 思考スキルを無意識に使わせる段階 (10月)

課題 3人の美女がいます。実は「天使」「悪魔」「人間」が一人ずつです。しかも「天使」は, 常にホントのことを言います。「悪魔」は常にウソをつきます。「人間」はホントかウソか, 時によって使い分けます。では, 黒髪の女「私は天使じゃありません」茶髪の女「私は人間じゃありません」金髪の女「私は悪魔じゃありません」  
いったい, 誰が何でしょう?<sup>11</sup>

この課題に取り組むと, 「もし黒髪が天使だとすると(ならば)…」と仮定して推論していくことになる。無意識に使った「仮定して考え

るスキル」を「仮定スキル」と名付け, 「仮定スキル」を使うと問題の解決を図ることができ易くなることを生徒に説明した。

#### ② スキルの文型を意識させ, その文型の活用を図る段階 (11月)

第一段階で扱った論理クイズと似た課題において, 「『もし〇〇ならば…』という文型を使って答えなさい」と指示し, 生徒に説明を促した。

#### ③ 仮定スキルのよさを実感させる段階 (11月)

同様の論理クイズの解決場面で, 仮定スキルを使って説明するよさを実感させた。

#### ④ 日常的に仮定スキルの活用を促したり, 活用した生徒を賞賛したりする段階 (12~1月)

国語の授業で実際に行った二つの授業実践の一部を紹介する。

ア. 小説『まき割り』(伊集院静)の授業実践  
発問「少女の『黒い靴下』は, 何を象徴していると考えられますか。」

生徒の応答例

S 11 もし, 「靴下が白かった」とすると, まだまだ未熟だという感じがする。黒い靴下というところから, 一生懸命習い物に通っていて, その楽器のプロって感じが伝わってくる。

教師 S 11さんは, 仮定スキルで答えましたね。素晴らしい。みなさんも, 同じように, 仮定スキルを使って答えなさい。

S 12 もし, 「赤い色」だと, 情熱的って感じがするけど, 黒だから, 少女の大人びた雰囲気を感じられる。

S 13 黒は, 少女の気の強さを表していると思う。違う色だとすると, 気の強そうな少女の性格が出てこない。

イ. 小説『トロッコ』(芥川龍之介)の授業実践  
発問「良平の最も大きな心の転換点はどこですか。」

生徒の応答例

S 14 「薄ら寒い海が開けた」とあります。この「薄ら寒い海」は, 良平の心がトロッコの喜びから冷めたことを表しています。もし, まだトロッコを押すことに夢中なら, 「日の当たる海が開けた」といった表現になると思います。ですから, トロッコへの熱が冷めた, ここが一番大きな心の転換点だと, 私は考えます。

教師 S14さんは、既に「仮定スキル」の活用を自分のものにしていきますね。「もしトロッコに夢中なら…」、確かに海の描写は、「薄ら寒い」にはならないでしょうね。

S15 「門口へ駆け込んで安心した」という先ほどの意見に私は反対です。もし、家に帰って心が落ち着いたのなら、親を見て安心すると思います。「いくら大声に泣き続けても、足りない気持ちに…」とはならず、ほっとして泣き止むはずです。ですから、家に駆け込んでも、安心したわけではないと思います。

この段階では、波線部にあるように、日常の授業において生徒が活用した仮定スキルを教師が顕在化し賞賛することで、生徒のメタ認知に働き掛け、さらなる活用を促している。

## (2) 平成19年度の調査

調査は、仮定スキル以外のスキルの定着を測る問題とともに行った。全三問三十分の調査であり、生徒が、この問題にかけた時間は十分程度であった。

H20/2/15 調査学級 N中1学年117人  
次の短歌を読んで、後の問いに答えなさい。  
石川啄木

何となく、  
今年はいい事あるごとし。  
元日の朝、晴れて風無し。  
※あるごとし……あるような気がする。

問い 昨年の啄木は、どうであったと考えますか。次から選び、記号に○をつけなさい。

- ア 幸せであった イ 幸せであったとは言えない  
ウ 幸せでも不幸でもなかった  
エ 幸せでもあり不幸でもあった

そのように考えたのはなぜですか？  
根拠を明らかにして説明しなさい。

仮定スキルを活用したかどうかは、平成18年度の調査と全く同じ観点で評価した。

仮定スキルを使った記述例は次のとおりである。

S16 もし、昨年は幸せだったとしたら、「今年は」ではなく「今年も」となるはずです。「今年はよいことあるごとし」と書いてあるから、昨年は良いことがなかったのだと思います。(引用者後略、傍点)

## (3) 平成19年度の調査結果

まず二つの観点で、生徒の解釈を分類した。

- ・妥当性のある根拠で解釈を述べたかどうか。

- ・仮定スキルの文型を使っていたかどうか。

1	解釈が妥当であり、仮定スキルを用いた生徒	69人	(60%)
2	解釈が妥当であり、仮定スキルを用いなかった生徒	30人	(26%)
3	解釈が妥当でなく、仮定スキルを用いた生徒	4人	(3%)
4	解釈が妥当でなく、仮定スキルも用いなかった生徒	14人	(12%)

平成18年度の調査結果と平成19年度の調査結果は、その授業過程と学習集団の年齢が異なっていたにもかかわらず、偶然にも酷似し、どちらもおよそ60%の生徒が仮定スキルの文型で答えていた。

なお、この割合の高さについて、「問い自体が、仮定スキルの活用を促す構造になっているのではないか」とも考えられたため、同じ調査問題を他の学校でも実施してみた。実施したのは、学力的に大きな差がないと推測される、他の大学附属中学校の2年生(1学級39人)である。すると、その学校の結果は次のようになった。

H20/4/18 調査学級 A中2年1組 39人  
○仮定スキルを用いた生徒…… 7人 (18%)  
○仮定スキルを用いなかった生徒 32人 (72%)

## (4) 平成19年度の調査結果の考察

学力が似ていると思われる他の中学校の同時期の生徒における調査結果でも、スキルを教えていないにもかかわらず、18%の生徒がスキルの文型で答えていた。また平成18年度の調査では、「意識していなかったが、結果として仮定スキルの文型を使った」という生徒が全体の32%いた。このことから、問いの構造と仮定スキルの文型の活用に関係がないとは言いがたい。そして、その問いの構造が後押しすることで、スキルの学習をした生徒の活用が60%という非常に高い割合になったと言える。

しかしながら、この60%という活用に教育的意義がないというわけではない。スキルの学習を積み重ねた生徒のスキル活用が60%であり、学習していない生徒のスキル活用が18%と、その差が顕著であったからである。この割合差を比較すると、スキルの学習の成果が42%という大きな差を導いたと判断できる。

つまり、仮定スキルの学習の成果により、多くの生徒にスキルの転移が図られたということである。この結果から「読みにおける方略の一つ、仮定スキ

ルは、他の解釈の場面に転移する可能性がある」といえる。

また、この調査のほか、「他の場面で仮定スキルを活用したことがあるかどうか」をアンケートで尋ねた。そして、「『活用した』という人は、どんな場面で活用したか」を記述させた。すると、次のような回答が寄せられた。

S17: 理科の学習の時に、「もしこのAが砂糖だとしたら、これは熱するとこげるだろう」というように仮定してから実験をしました。

7人の生徒が、このように他教科でも仮定スキルを使って推論をしたと記述した。これらの記述から、メタ認知能力の高い一部の生徒は、質の異なる問題解決の場面でも仮定スキルを活用しようとしていることが示唆される。

なお、平成18年の授業実践『喪失ではなく』で行った「話者は大人になることを喜びだと言っていますか、哀しみだと言っていますか」という発問と、調査で出題した「この童話の結末を母は知っていたのか、知っていなかったのか」という課題は、問いの構造が類似しているとも言える。一般に、「方略獲得時と似た状況への転移 (near transfer) は起こりやすい」<sup>12</sup>ので、この文脈に沿うと仮定スキルは妥当な転移を起こしたと判断できる。

しかしながら、類似性の高い課題が転移を生じさせたからといって、やはり、上述の結果が意味をもたないということはない。類似性の高い課題で仮定スキルを転移させた生徒は、似た課題においてスキルの活用を繰り返す。そして、「ことば一経験」の連関構造のコードの修正を行い、読みを広げたり深めたりしていく。その過程で、生徒が仮定スキルを活用するよさを実感することになると予測されるからである。その実感を得ることで、生徒は、メタ認知を働かせ、類似しない問題においても仮定スキルの活用を図っていく可能性が大きい。

## 7 仮定スキルが転移する条件

長年、思考指導にかかわってきた井上 (2007) は、「思考指導が有効か否かを考察する際に、いばん問題になるのは、『転移 (transfer)』の問題である」<sup>13</sup>と述べている。そして、「『方法』をいくら教えてもダメだ」とする否定的な見解と「『方法』を教えることは有効である」とする肯定的な見解の両者を取り上げ、「転移をめぐる以上二つの考えの

どちらに軍配を挙げるべきかは、現在の段階では決定できない。今後さらに実証的な研究が必要とされるところである」<sup>14</sup>と指摘している。

筆者は、この井上の指摘に答えるべく授業を実践した。その結果は既に述べたとおりである。

平成18年度と平成19年度の二つの授業実践の結果を基に、仮定スキルが転移すると考えられる条件を整理すると、三点になる。

- 1) 似た読みの課題に対しては多くの生徒に転移が生じ易い。
- 2) 無意識のうちに用いていた仮定スキルを意識化させ、メタ認知させて活用を図ると、他の場面への転移が生じ易い。
- 3) 仮定スキルを活用することのよさや意義を実感している生徒ほど、その転移が生じ易い。

「転移は、生徒のメタ認知能力を高めることによっても促進される」<sup>15</sup>という見解を援用すれば、この条件は妥当である。

これも、方略使用を促進する要因として、村山航 (2003) が「重要になってくるのは、方略に対する有効性の認知である」<sup>16</sup>と述べていることと合致している。

このように、「課題の類似性」「メタ認知への働き掛け」「方略に対する有効性の認知」の三点が、仮定スキルが転移する条件として確認された<sup>\*5</sup>。

これらの転移の条件は、今までの認知心理学の研究成果とも対応している。

仮定スキルを活用した読みの方略は、この三点の条件のもとでは転移する可能性が高いことが明らかになった。

なお、このことを裏返して言うと、これらの条件を満たさない場合、方略の転移は起きにくい可能性がある。方略の転移に否定的な見解は、メタ認知への働き掛けが弱かったり、方略を活用したことのよさを実感させなかったりした実践を基にしたのではないかということが推測される。

## 8 今後の研究課題

第一に、今回の授業実践の報告とその考察は、仮定スキルを活用して読むという読みの方略に射程を絞って言及している。他の読みの方略が、どのように転移するのかということについては、別の授業実践に基づいて考察する必要がある。

第二に、この読みの方略は、自転車に乗る方略の

ように、一度身に付けたら剥離することがないという類の方略ではないと考えられる。実践後三ヶ月をおかない時点では、このような60%という高い転移が確認できたが、時間の経過が方略の剥離をどれくらい促すのかといった検証も必要である。

第三に、この授業実践と調査は、標準学力検査で高い数値を有する学習集団を対象として行われた。この結果を一般化して考えることができるかどうかの検討も必要である。

このように、限定された範囲で確認された転移が一般化できるかどうかを検討することが今後の研究課題である。

#### <注>

- \*1 第一章「総則」には次のように記述されている。  
「学校の教育活動を進めるに当たっては、各学校において、生徒に生きる力をはぐくむことを目指し、創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。」(引用者波線)
- \*2 筆者は輿水実のスキル学習に批判的である。  
「組み立てに気をつけて読む」と言われても、具体的にどのように読めば良いのかが分からないからである。この例に限らず、輿水実のスキル学習は、読む時に気を配るべき観点を示しているにすぎない。気を配るべき観点では、「どのように読むのか」という方略には成り得ないのである。
- \*3 生身の生徒を対象とした実践研究では、条件をすべて整えて継続研究することは極めて難しい。その年度ごとに生徒も変わり教育課程も変化するので、辿る授業過程が異なってしまうことを断っておく。
- \*4 実践研究の内容と、調査結果の詳細については、新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校2008『平成19年度 研究開発実施報告書 第一年次』に詳しい。
- \*5 本研究の性格上、特に「メタ認知への働き掛け」と「方略に対する有効性の認知」については、統制された実験的手続きによる厳密な検証という形にはなっていないことを付け加えておく。

#### <引用文献>

- 1 鶴田清司 2008.4 「知識の活用を促す授業のあり方—『転移』に関する研究をもとに—」『授業研究21』誌 No.618 明治図書 p.13
  - 2 米国学術研究推進会議編 森敏昭・秋田喜代美 監訳 2002 『授業を変える』北大路出版 「転移—学んだことを活用するために」 p.72
  - 3 市川伸一 1993 『学習を支える認知カウンセリング』 プレーン出版 p.53
  - 4 山元隆春 1994 「読みの『方略』に関する基礎論の検討」『広島大学学校教育学部紀要, 第I部』, 第16巻 p.39
  - 5 井上尚美 2007 『思考力育成への方略<増補新版>』 明治図書 p.58
  - 6 宇佐美寛 1978 『授業にとって「理論」とは何か』 明治図書 p.22
  - 7 宇佐美寛 1983 『授業の理論をどう作るか』 明治図書 p.76
  - 8 同書 p.21
  - 9 山元隆春 2005 『文学教育基礎論の構築』 溪水社 p.389
  - 10 井上尚美 1998 『思考力育成への方略—メタ認知・自己学習・言語論理—』 明治図書 p.110
  - 11 逢沢明 2004 『頭がよくなる論理パズル』 PHP文庫 p.11
  - 12 三宮真智子 1996 「思考におけるメタ認知と注意」市川伸一編 『認知心理学4 思考』 東京大学出版会 p.173
  - 13 井上尚美 前掲書(2007) p.154
  - 14 同書 p.157
  - 15 米国学術研究推進会議編 前掲書 p.65
  - 16 村山航 2003 「学習方略の使用と短期的・長期的な有効性の認知との関係」『教育心理学研究』, 51, p.130
- <付記>この論文は、以下の大会での発表を再構成した。ご意見をくださった諸氏に感謝している。
- ・2006年5月 第110回全国大学国語教育学会 岩手大会 「文学作品を解釈する思考スキル」
  - ・2007年5月 第112回全国大学国語教育学会 宇都宮大会 「思考スキルが転移する可能性」
  - ・2008年6月 第114回全国大学国語教育学会 茨城大会 「思考スキルが転移する条件」
- (上越教育大学)  
2008. 8. 27 発送